

## 庵治の「彫刻」に泊まる-断絶された採石空間を体験する-

1240077 白井滉大

指導教員 渡辺菊真

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

### 1. 背景

庵治町は香川県高松市の北端に位置し、「庵治石」と呼ばれている斑模様の美しい石が採石されることから、採石工場や石材屋、彫刻家が多く集まる町である。

採石を生業とする職人は、「採石とは山と対話し、山を「彫刻」している」と語っていた。採石範囲を決める指標として、山には南北に横断する帯状の「カサネ」、東西に横断する亀裂である「断層」、水平方向には「シキ」、xyz 軸それぞれにルールがある。これが山との対話の正体であり、職人はこれを見極めて一手一手削っていく。勿論、安全面から、山の頂点から 70°、高さ 800m 幅 8km までしか掘れないという石の組成によらないルールもある。ただ、本質的には自然を見極め作られた、山を対象とする膨大な「彫刻」である。以後これに倣い、採石を「彫刻」と表現する。

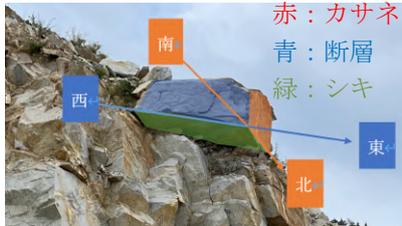


図1 採石ルール

本設計は、江戸時代に「彫刻」された採石場を対象としている。江戸時代においても、自然に沿って「彫刻」されるが、その手法や安全面のルールの違いにより、現在とは違った顔を見せる。本来「彫刻」が終わると、山の復元の為に、埋め立てをした後に植林をする事が決まりである。この地は、現在埋め立ての最中であり、庵治で江戸の「彫刻」が残る唯一の採石場となる。この唯一残っている「彫刻」の歴史や魅力を体感させる事が出来ないかと考えた。

### 2. 目的

本設計は、江戸の「彫刻」が残る断絶された空間に1日滞在しながら体験できる宿泊施設を設計することを目的とする。また、現在と江戸の「彫刻」の違いも体験させる。

現在稼働中の「彫刻」については、各石材屋がツアーを行っており、これに参加する事で体験する事が出来る。これは一般の人から海外の観光客など、様々な人が参加可能である。本設計では、これに参加した後江戸の「彫刻」を訪れる機会を与え、日々変化する現在の「彫刻」と不動の江戸の「彫刻」のどちらも体験させる。江戸の「彫刻」については、1日滞在する事で、時間による

様々な変化を体験させる。

### 3. 設計指針

- 1) 江戸の「彫刻」と現在の「彫刻」の両者の体験を通じて、歴史的な「彫刻」の変化を体験させる
- 2) 江戸の「彫刻」における宿泊施設計画
  - a) 安全に江戸の「彫刻」を体験させる
  - b) 時間の変化を含めて江戸の「彫刻」を堪能させる
  - c) 採石ルールを空間形成に取り入れ、江戸の「彫刻」体験をより強化する

### 4. 設計手順

- 1) 敷地の選定と調査
- 2) 全体計画の策定 -1日の体験計画-
- 3) 宿泊施設計画の策定
  - 3-a) 宿泊施設の安全計画
  - 3-b) 時間の変化を含めて江戸の「彫刻」を堪能させる計画
  - 3-c) 採石ルールを適応した空間計画

### 5. 設計内容

#### 1) 敷地の選定と調査

本設計は香川県高松市庵治町の図2の①に示す江戸の「彫刻」を対象とする。ここでは大きめの石材が取れなくなった為、「彫刻」が終了し、既に5m程埋め立てが行われている。図に示す四方面に「彫刻」があるが、本計画では山の中央に向かい掘られた為、高さ75mと迫力がある西面の「彫刻」を主たる対象とする。



図2 敷地の詳細写真

出典：地理院地図に追記をして掲載

#### 2) 全体計画の策定 -1日の体験計画-

- 計画での1日の体験の流れの1例をIからVに示す。
- I 観光客は石材屋を訪れる。そこから専用の車にて、現在の「彫刻」の見学へ向かう。ここでは写真1のような風景と共に、「彫刻」されている風景を音と共に体験する。
  - II 石材屋へ戻り、図2の②に示す駐車場へと車で訪れる。

ここで初めて江戸の「彫刻」と対面する。この時、写真2のように江戸の「彫刻」を北面から眺める事ができる。



写真1 現在の「彫刻」 写真2 駐車場から見た江戸の「彫刻」

Ⅲ 歩いて宿泊施設へと向かう。敷地に入って直ぐに江戸の「彫刻」の全体像を正面から体験する。

Ⅳ 宿泊施設の内部へと入り、エントランスへと向かう。ここでは、写真3のように江戸の「彫刻」を南面から眺める。ここまでの流れにより、駐車場、敷地への侵入時、エントランスにて3方向から体験できる。

Ⅴ 宿泊室へ入り、写真4のように対象の江戸の「彫刻」を見上げると共に、時間の流れと共にゆっくりと変化を楽しむ。また、現在の「彫刻」では、日に数回発破作業が起こる。この時は宿泊室の地下へ避難し、音や振動と共にこのイベントを楽しむ。



写真3 エントランスからの風景



写真4 宿泊室からの風景

写真1が現在の「彫刻」を、写真2,3,4は江戸の「彫刻」である。安全面の観点から、現在は一定の高さで段々に「彫刻」する。しかし江戸の「彫刻」はこのルール以前のものの為、山の頂点から真っ直ぐ下方に70°で「彫刻」されている。ルールによる違いは単純だが、作られる風景の違いは一目瞭然である。

### 3) 宿泊施設計画の策定

#### 3-a) 宿泊施設の安全計画

今回の敷地では、自然災害や発破作業による落石による危険がある。この対策を図3に示す。

屋根には、「彫刻」時に  
出た砂利を敷き詰める。  
これにより、屋根への落  
石の衝撃を逃す。またこ  
こで跳ねた石は、カベ①  
が受け止め、溝に落ちる。

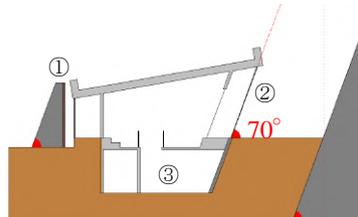


図3 断面図

「彫刻」方面や溝には、  
100mm から 1000mm 間隔の縦ルーバー②を設ける。これ  
により、落石が窓などへ当たるのを防ぐ。

また、宿泊室には地下室(③)を設ける。ここは主に寝

室等を配備するが、災害時などはここへ避難する。

#### 3-b) 時間の変化から江戸の「彫刻」を堪能させる計画

本計画では、太陽の光による表情の変化から江戸の「彫刻」を堪能させる。江戸の「彫刻」は敷地の西側に位置する。太陽は、朝には正面、昼には横側から「彫刻」を照らし、夜に近づくに連れて、「彫刻」の裏側へと沈む。彫刻にできる陰が新たな発見を宿泊者に与える。そのイメージを図4に示す。



図4 太陽の動きによる江戸の「彫刻」の1日の変化のイメージ

#### 3-c) 採石ルールを適応した空間計画

宿泊施設には図1にある「カサネ」、「断層」、「頂点から70°角」の3つのルールを当てはめる。図3に示すカベ①は、宿泊施設を南北に横断する。これにより、庵治の山を南北横断する「カサネ」を表現する。素材は勿論「カサネ材」を使用する。また、宿泊室やエントランスにある縦ルーバー②は断層を表現する。これは「断層」の間隔である100mmから1000mmで設けており、1000mm間隔の所から「彫刻」を眺める事ができる。宿泊室の手摺とカベ①の溝にある縦ルーバーも同じ間隔で設けており、東西方向の繋がりを持たせる事で「断層」を表現する。

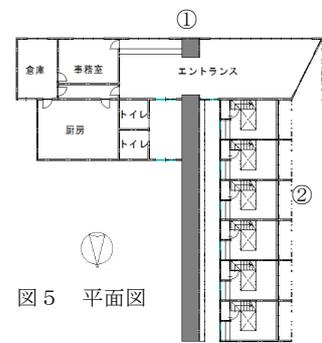


図5 平面図



図6 イメージ模型

また、①と②は「彫刻」方向に70°で傾いている。

この3要素が宿泊者に気づきを与え、体験を強化する。

### 6. まとめ

今回設計した宿泊施設により、庵治に興味を持った人がより深く庵治の「彫刻」を体験することが可能となる。また、新たに庵治に興味を持った人が数多く訪れることで、「彫刻」の歴史やルールが継承されていくことを期待する。

### 7. 制作の協力者と参考文献

協力者：株式会社大川石材 大川弘展様

〒761-0121 香川県高松市牟礼町 2775-13

参考文献：図2 国土地理院地図 <https://maps.gsi.go.jp>